

獨子蒜

山蒜ヲ圃ニテ培養スル者ニシテ、即小蒜ナリ、故ニコビルト云、

〔倭名類聚抄^{十七}〕獨子蒜。崔禹錫食經云、獨子蒜、和名比止豆比流、一云獨子蒜。孟詵食經云、獨頭蒜、

〔箋注倭名類聚抄^九〕本草和名云、葫、崔禹曰、獨子大者蒜、小如百合片者、按崔意、獨子大者名葫、小如

百合片者名蒜也、此引作獨子蒜、恐誤、中、本草和名、獨子葫、在葫條、別無和名、略、中、按本草、葫條、陶

注云、取其條上子、初種之成、獨子葫、明年則復其本也、是獨子葫出、陶弘景注、此蓋從本草和名引之、

一云似當作陶景曰、

〔類聚名義抄^八〕獨子蒜ヒトツヒル

澤蒜

〔倭名類聚抄^{十七}〕澤蒜。兼名苑云、澤蒜一名蘼、音嚴、和名、水蒜也、生水中、葉形氣味不異家蒜、

〔箋注倭名類聚抄^九〕澤蒜又見本草拾遺、李時珍曰、本草衍義所說宅蒜、即澤蒜之誤、玉篇、蔞、似蔞、生

水中、蘼古文、音嚴、與集韻合、略、中、本草綱目引陳藏器曰、澤蒜根如小蒜、葉如韭、又生石間者名石蒜、

與蒜無異、李時珍曰、山蒜澤蒜石蒜同一物也、但分生于山澤石間不同耳、人間栽蒔小蒜、始自三種

移成、故猶有澤蒜之稱、又呂忱字林云、蔞、水中蒜也、則蒜不但產于山、而又產于水也、按澤蒜、見賦役

令主計寮式、

〔類聚名義抄^八〕蘼音嚴、ネヒル、澤蒜ネヒル

〔倭訓栞^{中編十八}〕のびる。古事記の歌にみゆ、日本紀にはのにひる、つみななどみゆ、野蒜の義、小蒜

也といへり、和名抄にはこひる、又めひるとよめり、加賀にねんぶりといふ、野必大は和名抄の澤

蒜ねびるといふ是也といへり、

〔物類稱呼^三〕野蒜のびる。加賀にてねんぶりと云

〔本朝食鑑^三〕山蒜訓、彌比流、今

釋名、澤蒜源、順、野蒜俗稱、中略、必大、平野、按、是不獨生水中、亦山野、